

切込焼窯跡 (きりごめやきかまあと)

所在地 宮城県加美郡加美町宮崎字切込

指 定 加美町指定史跡 平成 14 年 1 月 30 日

概 要

県内では数少ない磁器を中心に生産を行った近世窯跡で、その製品は切込焼と呼ばれています。窯跡は丘陵裾南西向き斜面の標高 150～165m付近にあり、北西側から西山、中山、東山と呼ばれています。これまでの発掘調査により西山連室式登窯、西山磁器製作工房跡、中山窯燃焼室などが確認されています。

切込焼の操業については諸説ありますが、伝世品に記された銘文から判断すると、およそ天保年間と考えられます。この天保 11 年（1840）には、秋田の寺内から陶工山下吉蔵がやってきました。彼の活躍はめざましく、その後、弘化・嘉永・安政年間に切込焼は最盛期を迎えました。経営も拡大し、出資と販売には仙台の商人も担当、仙台藩の援助も始まりました。

そして安政元年（1854）、13 代藩主伊達慶邦によって切込焼は仙台藩の直営事業となります。ただ、それから間もなく幕末における国内外の情勢の急変や東北の冷害が重なり、切込焼は早くも衰退の兆しがあらわれ、元治元年（1864）には棟梁として活躍した山下吉蔵がこの世を去ります。2 年後には窯場そのものが仙台城下の北六番丁へ移り、明治 12 年に閉窯に至りました。

その後、大正期に切込焼復興の機運が高まり、販売する段取りまでこぎ着けた時に、不運にも未曾有の経済界の大恐慌に遭い閉窯に追い込まれました。

